女子高生、中古音を学ぶ(1)

中村雅之

１．若菜、合格する

とある地方都市、高校 3 年生の若菜はつい最近、総合型選抜で某公立大の外国語学部から合格通知をもらった。合格の決め手は「所有と存在の表現について--日本語・英語・中国語・ロシア語の対照研究」というレポートだった。これは「兄弟はいますか？」のような表現に所有表現〈have〉を使うか存在表現〈be〉を使うかというテーマだ。この例に関しては英語だけが〈have〉で、他はみな〈be〉なのだが、「辞書をお持ちですか？」のような例になると、中・露は〈be〉だが、日本語では〈have〉が現れるなど、一筋縄では行かない。種々の例を集めて比較対照をおこなったのが言語系の先生方にはウケたようだ。

若菜は 2 年の秋から NHK ラジオの中国語講座を聴き始め、3 年の春からはロシア語講座を聴いている。これらは全て言語オタクの国語教師である葵（あおい）先生の影響だ。日・英・中を対象としたレポートの骨格は 2 年生終わりの春休みに出来ていたのだが、葵先生に見せたところ、ロシア語も追加すると面白くなる、というアドバイスをもらい、4 月からロシア語にも精を出したのだ。親や友人たちは真面目に受験勉強をしないので心配していたが、若菜は早くから総合型選抜に専念する決心をしていた。ラジオ講座を聴くのは趣味であると同時に入試対策の一環でもあった。英語・古文・漢文以外の科目にあまり興味を持てない彼女は、言語に関する研究ができる大学に行こうと思っていたところ、県内の大学の外国語学部が、英検 2 級以上を持っていれば、志望理由と研究レポート（あるいは活動報告）だけで選抜するというので、そこの中国語学科を第一志望に決めて、夏休みの大半を費やしてレポートを仕上げたのだった。

「合格通知をもらってから生活は変わった？」と葵先生が問いかける。

「いいえ全然。必死に受験勉強をしている同級生の手前、遊び惚けるわけにもいきませんし、外国語三昧です」

「中国語とロシア語の他にも何か始めたの？」

「10 月からドイツ語講座を聴き始めました」

「それはいいわね。2 か月を過ぎた頃か、動詞の人称変化と冠詞類の格変化の説明が終わって、話法の助動詞が出て来る頃ね」

「うわ、さすが言語オタク。スラスラと文法項目が出てきますね」

「さんざん苦労したからね。初級段階での最初の難関は形容詞の格変化だね。せっかく定冠詞と不定冠詞の格変化を覚えたと思ったら、もっと面倒くさい形容詞と分詞の格変化を覚えなくてはならない。まだ若くて頭が柔らかいうちに覚えた方がいいわね」

「楽しみ！頑張ります。ところで、ひとつお聞きしたいことがあるのですけど……」

２．若菜、仙人に会う

最近は毎朝、中国語の発音練習として唐詩を朗読するのが若菜の日課だ。大きな声で読むのは楽しい。だが、いくつかの詩を読み上げながら、これは本当に正しく韻を踏んでいるのか？と疑問を感じることがあった。それについて葵先生に質問したところ、それはね……と説明しかけたのを止めて、しばらく考えてからニヤリと笑って、「その質問に答えてくれる良い先生を紹介してあげようか」と悪戯っぽい眼差しで囁いた。葵先生の大学時代の指導教官だった人で、今はこの市の外れに住んで、晴耕雨読ならぬ晴読雨読の老後を過ごしているという。昔から飄々とした佇まいをしていて、皆から“仙人”と呼ばれていたらしい。葵先生に連絡を取ってもらい、週末に訪問することになった。

ひっそりとした家の前でおとないを告げると、70 歳ぐらいかと見える老人が現れた。自己紹介をすると、軽く頷き、居間に招き入れてくれた。

「唐詩に興味があるそうな」

と仙人は静かにいう。

「はい。詩の内容もさることながら、当時の発音に興味がありまして」

「ほうほう」

「現代中国語で読んでみても、はっきりと韻を踏んでいるという実感がないものですから。ひょっとして当時の音で読めれば、気分良く朗読ができるのではないかと思いまして」

「なるほど。しかしその辺はアオイ君の専門だ。教えてくれなかったのかな」

「葵先生いわく、自分が教えると厳密になりすぎて、聞いている方が嫌になるだろうから、自分が大学時代にお世話になった話の上手な先生を紹介するということでした。いつも本ばかり読んでいる方なので、よい気晴らしになるだろうからと」

「ふむ、それは大きなお世話だと言いたいところだが、まあ時には若い人と話をするのも悪くない。それで何の詩を読んだのだね」

３．国破れて山河あり

若菜が最初に気になったのは、杜甫(712-770)の「春望」だという。中学の頃に習っていたので、訓読ではほとんどそらんじていた。韻字は深・心・金・簪の四字だが、現代音では shēn・xīn・jīn・zān となり、声調は合っているものの、押韻の爽快感は全く感じられない。そんな話をしたところ、仙人は、とりあえず“ざっくり中古音”で読んでみようか、と言った。中古音とは南北朝後期から唐代にかけての発音で、仙人の言う“ざっくり中古音”とは研究者が気にするような細部には目をつむった、解像度 80%ぐらいのものだという。唐詩を唐代音で読む雰囲気を味わうためには、多少大雑把な方が都合がよいのだそうだ。仙人はその発音を IPA（国際音声字母）で書いてから、朗々と読み上げた。

國	破	山	河	在	国破れて山河あり
kuək	pʰɑ	ʃan	ɦɑ	dzɑi	
城	春	草	木	深	城春にして草木深し
ʒiɛŋ	tʃʰiuən	tsʰɑu	muk	ʃim	
感	時	花	濺	涙	時に感じて花も涙をそそぎ
kɑm	ʒi	hua	tsiɛn	liui	
恨	別	鳥	驚	心	別れを恨みて鳥も心を驚かす
ɦən	biɛt	tiɛu	kiɛŋ	sim	
烽	火	連	三	月	烽火、三月に連なり
fuŋ	huɑ	liɛn	sɑm	ŋiuɛt	
家	書	抵	萬	金	家書、万金にあたる
ka	ʃio	tiɛi	ɱan	kim	
白	頭	搔	更	短	白頭、搔けば更に短く
bak	dəu	sɑu	kaŋ	tuɑn	
渾	欲	不	勝	簪	すべて簪にたへざらんと欲す
ɦuən	jiuk	fuət	ʃiəŋ	tʃim	

４．入声（にっしょう）

若菜は仙人の読み上げる「春望」を聞いて、うっとりしてしまった。

「リズムがいいですね。偶数句の最後が-im で韻を踏んでいるのもよく分かります」

「うむ。現代北京語とリズムが違うのは、-p/-t/-k で終わる短い声調があるからだ。これを入声という。香港の広東語や台湾の閩(ビン)南語など、南の方言には今でも入声があるが、北京語などの北方方言では末尾の-p/-t/-k が消えてしまったのだ。上海などの呉方言では-p/-t/-k の区別はないが、詰まった音として入声が残っている」

「詰まった音というと、“アッ”という時の小さい“ッ”のようなものですか」

「そうだ。音声学では声門閉鎖音という。ちなみに、-p/-t/-k は口の構えだけで息を出さない音で‘内破音（ないはおん）’という。中国語だけでなく、朝鮮語・タイ語・ベトナム語などにもこの音がある。どのような発音か知りたければ、google で「広東語、数字、音声」などで検索すれば、実際に発音している動画がたくさん出て来るから一度聞いてみるといい。一・七・八が-t、六が-k、十が-p だ。」

「ちょっと今、検索してみてもいいですか。…（スマホで聞く）…なるほど！内破音って本当に構えだけでピタッと止まる感じですね。それと、三の-m もはっきり聞こえました」

「ふむ。現代北京語では-m はすべて-n に変わっているから、音節末音の-m も中古音の特徴の一つだな。日本語でも「三位一体（サンミイッタイ）」と読むのは「三」が-m だった証拠だ。「陰陽師（オンミョウジ）」の「陰」も同じだな。韻尾つまり音節末音に関して注意するのはそれぐらいかな。あとは声母に関してだが、破 pʰɑ のように有気音を右肩の小さい

「h」で示している。昔は右肩に「‘」を付けて有気音を表したものだ。古い概説書や論文にはその表記も出て来るから知っておくといい。鳥 tiɛu や家 ka のように h が付いていなければ無気音だ。在 dzai や別 biɛt は濁音（有声音）なので、気を付けるように」

「あ、濁音があるのですね」

「そう、それも現代音との違いだな。[t] [tʰ] [d] が順に無気音・有気音・濁音だ。よし、ワカナ君、自分で読んでみようか。[si] [zi] など、ピンインと混同しないように」

「え？もうですか。エーッと、河 ɦɑ とか萬 ŋan が読めません」

「ɦ は h の濁音、ŋ は v を発音する形で m を発音したものだ。難しければ、今の段階では、それぞれ h と m で代用しても構わない。特に ŋ なんかは理論上のものだからな。声調も、入声以外は現代北京語と同じで調子で読むことにしよう」

「分かりました！」

張り切って読み上げる若菜。何回か読むうちにコツが掴めてきた。

５．平仄（ひょうそく）

葵から聞いていた通り若菜の言語感覚はなかなかのものだ、と感心した仙人。飽きずに朗読を続ける若菜に、少し休憩しよう、と声をかけた。

「平仄については知っているかな」

「はァ、言葉は聞いたことがありますが、詳しくは……」

「詩を作る時には細かな決まりごとがあるのだ。特に平仄に関しては厳しい。平仄とは声調の種類なのだが、まず、唐代の人は声調を４種類と認識していた。厳密に言えば、古来４種類とされてきたので、唐代にも４種類ということにしておこうという了解があった。」

「その言い方だと、実際には４種類ではなかったという風に聞こえますが」

「ふむ。おそらく６種類だったのではないかなあ……いや、少し脱線した。今日の所は４種類ということにしよう。」

「……なんだかスッキリしませんね」

「まァ、モヤモヤ感を抱えておくことも大事な修行だ。もう少し話が進んでから説明することにしよう。初めから寄り道をしていると、本筋を見失うことになる。とにかく４種類だ。平声・上声・去声・入声だ。読み方は伝統的にはヒョウショウ・ジョウショウ・キョショウ・ニッショウだが、ヘイセイ・ジョウセイ・キョセイ・ニュウセイでも構わん。多くの人は、ヘイセイ・ジョウセイ・キョセイ・ニッショウという混合読みをしている」

「今の１声・２声・３声・４声ですか？」

「いや、そうではない。対応関係は以下の如くだ。

中古音	平声	上声	去声	入声
現代音	１声・２声	３声	４声	1〜4 声

入声は-p/-t/-k が消えて他の声調に合流した。本当はもっと説明が必要だが、今は省く」

「ハァ、それで平仄というのは？」

「平声が文字通り‘平’で、それ以外の声調が‘仄’だ。現代音で 1 声と 2 声が‘平’、3 声と 4 声が‘仄’。ただし、入声は必ず‘仄’だ。入声は日本語の音読みで 90%は分かる。昔の人は‘フクツチキに平字なし’と唱えていたらしい。十（ジュウ＜ジフ）、落（ラク）、結（ケツ）、八（ハチ）、石（セキ）のように、フクツチキで終わるものは入声なので、平声ではないということだ。十（ジフ）は旧仮名遣いだな。入声は短い声調なので、熟語で詰まる音つまり小さな「ッ」が出てきたら、もう間違いなく入声だ。十本（ジッポン）、落下（ラッカ）、結果（ケッカ）、八本（ハッポン）、石灰（セッカイ）などだ。」

「雰囲気は分かりました。詩を作る時にその平仄の規則があるのでしょうか？」

「たくさんあるのだ。代表的なものが、‘二四不同・二六対’と‘下三連の禁’と呼ばれるものだ。各句の第 2 字と第 4 字は平仄が同じではいけない（二四不同）、第 2 字と第 6 字は平仄が同じでなければならない（二六対）、各句の下 3 字の平仄を同じにしてはいけない（下三連の禁）ということだ。二六対はもちろん各句が 7 文字の場合、つまり七言絶句や七言律詩などに適用される」

「‘國破山河在’の場合だと、國（コク）は入声ですから仄、破は 4 声だから去声で仄、山と河はどちらも平、在は仄ですね」

「そうだ。破と河は平仄が異なっているから二四不同になっているし、最後の 3 字は平平仄だから、下三連の禁を侵していない」

「たしかに。でも毎回そんなことを考えながら作詩するのは大変ですね」

「いや、作詩に慣れている人なら、何も考えなくても平仄のリズムはからだに沁み込んでいただろう。ちょうど平安時代の宮廷人たちが和歌を作るのに、掛け言葉や字余りを自在に駆使するようなものだ」

「なるほど。でも時には規則にそぐわないものが作られたりはしないのですか」

「それはある。破格というやつだ。特に有名なのは杜牧（803-852）の“江南春”だろう」

「あ、去年の葵先生の授業で読みました。南朝四百八十寺（ナンチョウ・シヒャクハッシンジ）ですね」

「そうそう、まさにそこが問題だ。例によって、ざっくり中古音を書き出してみようか。平仄を調べてごらん」

千	里	鶯	啼	緑	映	紅	千里鶯ないて緑紅に映ず
tsʰiɛn	li	aŋ	diɛi	liuk	iɛŋ	ɦuŋ	
水	村	山	郭	酒	旗	風	水村山郭　酒旗の風
ʃiui	tsʰuən	ʃan	kuɑk	tsiəu	gi	fuŋ	
南	朝	四	百	八	十	寺	南朝　四百八十寺
nɑm	ɖiɛu	si	pak	pat	ʒip	zi	
多	少	樓	臺	煙	雨	中	多少の楼台　煙雨の中
tɑ	ʃiɛu	ləu	dɑi	iɛn	jiu	ʈiuŋ	

「あの、平仄の前に、‘朝 ɖʑiɛu’とか‘中 ʈʂiuŋ’ はどういう音でしょう？」

「ʈʂi はピンインの di［ti］と ji［tɕi］の中間ぐらいの音だ。理論的な産物なので、無理して正確に発音する必要もないのだが、要するに口蓋化した t だ。ロシア語の軟音だと思って呉れていい。ɖʑ はその濁音だ」

「ああ、分かりました。では平仄を見てみます。‘平仄平平仄仄平／仄平平仄仄平平／平平仄仄仄仄仄／平仄平平平仄平’です。ありゃ、第 3 句の‘南朝四百八十寺’は仄が 5 つも続いています。」

「それが問題だ。二四不同は守られているが、二六対になっていないし、下三連の禁も侵している。犯人は第 6 字にある入声の‘十’で、ここは平声字であるべきところだ。とはいえ、破格の詩は少なくないし、大目に見てもよいようなものだが、古来、この字を入声でなく平声で読むべしという主張があって、それに与する人たちは‘十’を ʒip ではなく、ʒim とあたかも‘諶’のように平声に読み替えたようだ。日本でもその習慣を入れて、八十寺（ハッシンジ）と読んでいる」

「そういうことか。それほど平仄というのは、詩において大事なのですね」

５．中古音と日本語の音読み

唐代音は中国語音韻史の中では中古音という区分に位置づけられる、と仙人は説明した。上古・中古・近世という区分は文学・文法・音韻の各分野で区分にズレがあるのだが、音韻史においては、中古音は広義には南北朝から唐代までを指し、狭義には隋の陸法言が編纂した韻書（発音字典）『切韻』の体系を指すらしい。『切韻』の体系は前期中古音（Early Middle Chinese）、唐代音は後期中古音（Late Middle Chinese）とも呼ばれるとのこと。

「前期中古音と後期中古音はどこが違うのですか」

「後期中古音の特徴は主に 3 点ある。その 1、主母音の数が減って韻母体系が単純化した。その 2、濁音声母が清音化した。その 3、唇音声母 p-/pʰ-/b-/m-の一部が f-/v-/ɱ-になった。以上だ。ま、時代差よりは方言差と言うべきかな」

「ウーン、あまりよく分かりません」

「そりゃそうだ。おいおい分かればいい」

「でも、サワリだけでも知りたいです！」

「そうだなァ、2 番目の濁音声母の清音化について、少しだけ話しておこうか。日本語で漢字の音読みには、多くの場合 2 種類の読みがあるだろう」

「ええと……平（ビョウ・ヘイ）とか行（ギョウ・コウ）とかですか」

「そうだ。一般に、6 世紀以前に伝わっていた南方の音を呉音、唐代になって長安から伝えられ音を漢音という。平（ビョウ）・行（ギョウ）が呉音、平（ヘイ）・行（コウ）が漢音だ。大雑把には呉音が前期中古音に対応し、漢音が後期中古音に対応すると考えていい。つまり、‘行’が前期中古音で濁音、後期中古音で清音なのを、ギョウとコウという音読みが

伝えているという訳だ」

「ということは、呉音で濁音のものは漢音では清音になる、ということですか」

「一部の例外を除けば、そういうことだ。試しに、白・平・強・図（圖）・定・成・静を呉音と漢音で読んでごらん」

「白は白夜のビャクが呉音で、白線のハクが漢音ですね。平は平等のビョウが呉音、平和のヘイが漢音。強は強弱のキョウが……漢音かな、すると呉音は……あ、強盗のゴウですね。図は図画のズが呉音、図書のトが漢音……なのでしょうか。サ行とタ行にまたがるのが気持ち悪いのですが」

「旧仮名遣いでは、ズでなくヅと書いた。元々は、呉音と漢音は清濁の違いがあっても、サ行ならサ行、タ行ならタ行でそろっていたのだ。すると次の定も分かるだろう」

「安定のテイが漢音で、定規のジョウが呉音だけど、本来はヂョウなのですね」

「正確にはヂャウだ。これは慣れてくると分かるようになる」

「はい。成功のセイは漢音ですね。呉音は何だろう？」

「願いが叶うことを何というかな？」

「おお、大願成就のジョウです！」

「最後は難問だ」

「静寂のセイが漢音ですね。これまでのパターンだと呉音がジョウになるはずですが、……そんな読みはあるかな？」

「血管に２種類あるだろう」

「アッ、静脈！うーん、なんで思い付かなかったのだろう。悔しい！」

「どうだい、前期中古音と後期中古音で声母の清濁に違いがあるということが実感できただろう。つまり、白（bak＞pak）・平（biaŋ＞p^hiaŋ）・強（giɑŋ＞k^hiɑŋ）・図（do＞t^ho）・定（deŋ＞tiɛŋ）・成（ʒiɛŋ＞ʃiɛŋ）・静（dziɛŋ＞tsiɛŋ）という感じだ。しかし、前に挙げた“ざっくり中古音”では敢えて濁音を濁音のままに示してある。そこは前期中古音風だな。ただし韻母については、簡略化した唐代の韻母に基づいている。つまり、声母は保守的、韻母は革新的というチャンポンの表記だ。」

「どうして、完全に唐代風に、つまり後期中古音で統一しなかったのですか」

「その話をすると長くなるから、機会を改めてということにしよう。音韻の話はあまり急ぐと消化不良になる。いずれにしても、呉音と漢音に詳しくなると、中古音の知識が格段に増えるぞ。今やったのはほんの一部だ。まあ、今日はこの辺にしようか。時間があるようなら、また来週おいで」

「よろしくお願いします。先生、何か来週までの宿題を頂けませんか」

「ふむ、それでは、入声と濁音に関するものを少し出しておこうか。どちらも日本語の知識がものをいう。-t/-k の入声はそれぞれ「ツ・チ／ク・キ」で終わるからすぐ分かる。-p はもともとフで終わっていたが今はウで終わるから、ただ音読みしただけでは本来-u だったのか-p だったのかすぐには分からない。頭の使いどころだ。それから濁音は漢音にもあ

るのだが、今回はそれには触れない。とりあえず、一つの漢字に濁音と清音の読みがあったら、濁音の方が呉音、清音が漢音だ。中国語の辞書は引いてもよいが、漢和辞典を見てはいかんぞ。自分で推測してみるのだ。完全に分からなくても構わん。アレコレと考えることが肝心だ」

「了解です。来週また伺います。」

６．ヘウレーカ！

翌日、若菜は放課後の教室で頬杖を突きながら、仙人から出された宿題を考えていた。昨日、仙人に会って唐詩と中古音について話を聞いたのが何とも楽しい時間だった。別れ際に宿題を出してくれるようにお願いしたら、次のような問題をプリントアウトしてくれた。

＜宿題＞

①次の中で入声字はどれか。「力、利、大、達」「号、合、高、甲」「修、習、九、急、」

②次の熟語の読みは呉音か漢音か。「大豆」「納豆」「頭痛」「頭髪」「奉公」「奉行」

③呉音と漢音の両方で読みなさい。「兄弟」「重複」「一途」

②と③はさほど苦労せずに分かった。②は大豆（ダイズ）・頭痛（ズツウ）・奉行（ブギョウ）が呉音、納豆（ナットウ）・頭髪（トウハツ）・奉公（ホウコウ）が漢音だ。呉音で濁音のものは漢音で清音になるという仙人の説明に合致する。豆と頭は漢音がタ行だから、呉音は旧仮名遣いでは「ズ」ではなく「ヅ」になるはずだ。

③は兄弟（キョウダイ／ケイテイ）・重複（ジュウフク／チョウフク）・一途（イチズ・イット）だろう。最後の例は‘凋落の一途’のイットはすぐ浮かんだが、‘一途な恋’のイチズを思い出すのに時間がかかった。‘いちず’は何となく和語かと思っていたのだ。この場合も旧仮名遣いでは「イチヅ」だろう。重複も「ヂュウフク」のはずだ。

①が難しくて、さっきから悩んでいた。第 1 グループは、力（リキ）と達（タツ）がそれぞれ-k と-t の入声なのは間違いない。第 2 グループは少し悩んだ。「合唱（ガッショウ）」と「甲冑（カッチュウ）」で小さい‘ッ’が出て来るから、合と甲が入声であることは明らかだ。単独で「ゴウ」「コウ」と読むのは何故か？しばし考えて、旧仮名が「ガフ」「カフ」で、-p の入声なのではないかと思いついた。同じ-p の‘十’がジフ＞ジュウという例を仙人が出していたはずだ。問題は第 3 グループだ。日本語では「シュウ・シュウ・キュウ・キュウ」だ。ヒントになる熟語も思いつかない。

「何をしているの？」と、葵先生が教室に顔を見せて言った。

「仙人からもらった宿題です。漢和辞典を見てはいかんぞ、と言われています」

「どれどれ、ふーん。①がやや難という感じね」

「その通りです。②と③はスイスイできたのに、①で悩んでいます」

「そうね、悩みなさい。それがあなたの仕事だから」

「分かっています。仙人にも自分で推測しろ、考えるのが肝心だと言われました」

「そういうこと。でもこの設問は親切よ、誘導問題付きだから。じゃ、頑張って」と足音も軽やかに出て行った。

誘導問題付き？何のことだろう、と若菜は考えた。つまり、第 2 グループは第 3 グループを説くための誘導問題ということか。そういえば、仙人は確か次のようなことを言っていた。

-p はもともとフで終わっていたが今はウで終わるから、ただ音読みしただけでは本来 -u だったのか-p だったのかすぐには分からない。頭の使いどころだ。

そうか、中古音で-u と-p のどちらであったとしても、現代日本語では‘ウ’で終わるのだ。第 2 グループの合と甲は現代北京音でそれぞれ hé と jiǎ で、どちらも-u で終わらない。しかし号と高は hào と gāo だ。これは［hau］［kau］と考えてよいだろう。とすると、日本語で‘ウ’で終わって、現代音でも-u で終わるものは、おそらく中古音でも-u だったもの。そして、日本語で‘ウ’で終わり、かつ現代北京音で-u にならないものは中古音で-p だったものだ。そうか、この方法だと、小さい‘ッ’が出て来る熟語が思い付かなくても-p の入声だと特定できる。これを第 3 グループに応用すればいいのだ。ウーン、確かに誘導問題かも。

「修、習、九、急、」は日本語では全部‘ウ’で終わるけど、そのうち修と九は現代音でも-u で終わるから、たぶん中古音でも同様に-u で終わり、入声ではない。一方、習 xí と急 jí は現代音が-u にならないから、-p の入声だ。

	日本語	北京語	中古音
修	シュウ	xiū	[-u]
九	キュウ	jiǔ	[-u]
習	シュウ	xí	[-p]
急	キュウ	jí	[-p]

旧仮名遣いではおそらく習（シフ）・急（キフ）に違いない。きっとそうだ。ワーオ、やったー！ヘウレーカ！

７．入声と何か

次の日曜日、意気揚々と仙人の所へ行き、宿題の成果を報告した。仙人は、「おお、よく頑張ったな。よし、褒美に“舟和の芋ようかん”をご馳走してあげよう」と言って、玄米茶と一緒に二切れの羊羹を出してくれた。何でも浅草の老舗の和菓子屋のものだそうだが、今では全国のデパートで買えるらしい。う、美味い！

「宿題は簡単すぎたかな」と仙人がニコニコ顔で言う。

「いえいえ。①の‘習・急’に手こずりました。分かった時は、思わずヘウレーカ！と叫

びましたよ」

「ほお、アルキメデスか。ちなみに、君はロシア語をやっているのだろう。ヘウレーカをロシア語では何というかな」

「ロシア語ですか？ウーン、‘思い付いた’ということだから、Придумала!（プリドゥーマラ）ですかね……」

「おお、大したものだ。きちんと完了体動詞の過去女性形を使っているな。でもまあ、ワカナ君の状況だったら、知的なロシア人はそのまま Эврика!（エーヴリカ）と叫ぶかもなあ」

「そーか、英語で Eureka!（ユリーカ）というのと同じですね」

「日本語でも、分かった！というよりはヘウレーカ！の方が気分が乗るだろう」

「確かに。でも、‘習・急’が中古音で-p だと分かった時は、本当に叫んじゃうほど感動しました。現代北京音と日本の音読みだけで中古音の情報が引き出せるのはすごいです」

「うむ。慣れてくると、入声韻尾だけでなく、音節全体の復元もかなりの精度で可能になる。入声韻尾はその第一歩だ。今日はまず、入声とは何かということから確認しよう」

「-p/-t/-k で終わる短い声調ではないのですか」

「そうなのだが、隋唐の人々になったつもりで考えてみようか」

「へ？」

「例えば、[kam] という音節を考える。[kam]^{平}で [kam] の平声を表すことにしよう」

「はい。[kam]^{上}が上声、[kam]^{去}が去声ですね」

「そうだ。では [kam]^{入}はどうだ？」

「え、いや、それはないのでは？ [kam] の入声って……」

「それが [kap] だ」

「ほへ？」

「つまり、昔の人は [kam] を短く発音すると [kap] になると感じていたのだ」

「[kam] … [ka^{m}] … [kap] か、なるほど。そう言われれば、そんな気がして来ました」

「それじゃ、[kat] [kak] は何の入声だろうか」

「えっとですね、[kat] は [kan] の入声で、[kak] は [kaŋ] の入声です」

「そういうことだ。[ka] [kau] [kai] のようなゼロ韻尾や母音韻尾の音節には入声はない。少なくとも隋唐の人々はそう考えていたようだ」

８．韻尾-m の識別

仙人はさらに続ける。

「現代北京音では韻尾は５種類だが、中古音では次の９種類があった。

（ⅰ）-ゼロ　-i　-u　　「歌、改、高」

（ⅱ）-m　-n　-ŋ　　「感、干、剛」

（ⅲ）-p　-t　-k　　「甲、割、各」

現代北京音にないのは、-m/-p/-t/-k だ。現在の中古音研究では、-ŋ と-k をさらに細かく

分けるのが主流だが、今は気にしなくてもよい」

「日本の音読みから入声の-p/-t/-k はほぼ復元できるということでしたね。残るは-m 韻尾ですが、これは現代北京音でも日本語でも分からないのでしょうか」

「完全には分からない。ただし、前にも述べた‘三’や‘陰’のように、日本語の熟語の中に-m の痕跡を見出せるものもある。本当は、朝鮮語を少し知っておくと、上の９種類の韻尾は全て識別できる。何か知っている朝鮮語はあるかい？」

「アンニョンハセヨ、カムサハムニダ、これくらいですかね」

「ふむ。それらは直訳すると、‘安寧でいらっしゃいますか’と‘感謝します’となる。つまり、安寧と感謝は漢字語だ。安寧は［anniɔŋ］だが、安は朝鮮語で［an］、北京音で ān だから、中古音でも-n 韻尾だ。寧は朝鮮語［niɔŋ」で日本語‘ネイ’、そして北京音は níng だから、中古音では-ŋ 韻尾だ。-ŋ は日本語ではーウ／ーイになる。そして感は朝鮮語［kam］で、北京音は gǎn だが、これは朝鮮語の発音を頼りに中古音で-m だと分かる。朝鮮語を覚えると韻尾は明快に判別できる。暇があったら君も朝鮮語をやっておくといいよ」

「それは葵先生にも言われています。1 カ月もやればそこそこの漢字語は覚えられると言っていました」

「日本語の音読みと一定の対応関係があるから、漢字語は非常に覚えやすいのだ。それに朝鮮語は音声学の見本のような言語だから、やっていて損はない。‘異音’とか‘異形態’あるいは‘同化’という音声学的概念を実際に口や舌で体感できる」

「-n 韻尾と-m 韻尾の識別には朝鮮語が最も有効ということですね。日本語には‘三位一体’のような都合のよい例はもうないのですか？」

「熟語はあまりないが、声符（セイフ）を利用する方法や、地名や人名などの固有名詞を利用する方法がある」

「セイフですか？」

「漢字の中の発音記号だ。格・客・閣は発音が似ているだろう。これは‘各’という声符を共有しているからだ。清・晴・情は‘青’が声符で、浅(淺)・銭(錢)・箋は‘戔’が声符だ。声符を共有している漢字は一般に韻尾が共通している。だから、-m 韻尾を持つ声符を知っていれば、その声符を持つ漢字も-m 韻尾だと分かる」

「具体例を教えて下さい」

「陰陽師（オンミョウジ）から‘陰’が-m 韻尾だと分かると、その声符である‘今’も韻尾が-m だと分かる。そして‘今’を声符にもつ含・吟・琴なども-m 韻尾ということになる。同様に、‘感’が-m 韻尾だと知っていれば、声符の‘咸’も-m 韻尾だし、箴・鍼・喊・撼なども-m 韻尾だ」

「なるほど。それは使えそうです」

「あとは固有名詞だが、奄美（あまみ）・信濃（しなの）・因幡（いなば）などの古い地名から、奄が-m 韻尾、信が-n 韻尾、因も-n 韻尾だと分かる。因縁（いんねん）という熟語からも因が-n であることは確かめられる。ただし、これらの固有名詞には限りがあるし、時

代的にもかなり古いものが混じるので、本質的な方法とは言えない」

「より本質的な方法は何かあるのですか」

「-n であることを決定できる方法はある。例えば、‘泉’とか‘観’が-m か-n かの判断に迷ったとする。しかし、-m 韻尾が-u-介音と共起しないという知識を持っていれば、これらが-n 韻尾だと判断できる」

「介音-u-と共起しないというのは、[kuam] のように介音-u-と韻尾-m が同時に出て来る発音はないということですか」

「そのとおり。だから、-u-介音を持つ漢字で、日本語や北京音で-n になるものは、中古音でも必ず-n なのだ。つまり、中古音で泉 [dziuɛn]、観(觀) [kuɑn] となる。観については、観音（カンノン）という熟語からも、観が-n 韻尾であることは見て取れる」

「そして、泉を声符に持つ‘線’もやはり-n 韻尾というわけですね。おおよそ分かりました。韻尾の-m と-n の識別は完全にはできないけれども、種々の情報を総動員すれば、かなりの所まで攻略できるということですね」

「一番効率がいいのは、やはり朝鮮語を学習することかな」

「今はまだドイツ語で手一杯なので、年が明けたら何とか頑張って取り組みます」

９．声母の清濁と声調

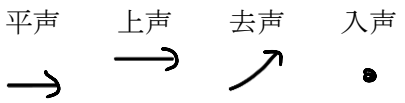
「先生、先週話題に出た唐代の声調のことが気になって仕方ないのですが。唐代の声調が６種類だったとかナントカ」

「おお、あれか。そうだなあ、ワシの妄想を話そうか」

「妄想ですか？」

「うむ。５世紀には、声調は４種類あった。沈約（しんやく、441～513）という学者が四声の配置を詩の作法に取り入れたと言われている。その調値は次の通りだった。調値というのは声調の実際の高さやメロディーだ。

＜図１＞



つまり、平声は低く、上声は高く、去声は上昇、入声は短い、ということだ」

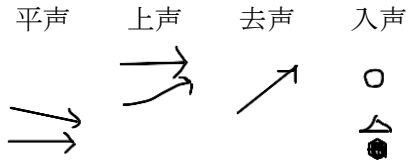
「どうしてそんなことが分かるのですか？」

「だから、妄想だ。とりあえず聞きなさい」

「はい、妄想ですね。オーケーです」

「６世紀後半になると、次第に声母の清濁によって、調値に分裂が生じてきた。もっとも、当時の人々には分裂し始めているという感覚はなかったかも知れない。大体、次のような感じだ。

＜図２＞



濁音声母を持つものは出だしが低くなって、平声と上声では二つに分かれた。下の線が濁音声母を持つ音節だ。去声は、急上昇調だったので、声母の清濁による違いがほとんどなかった。入声では、大まかには清音が高くて、濁音が低かったが、濁音の中でも次濁音と呼ばれる「m/n/ŋ/l/j」などは、全濁音（b/d/g/dz/z/ɦ など）よりはやや高めだった。図では●が全濁音、△が次濁音だ。上声の濁音はすぐに去声に合流した。図を見れば分かるように、調値が近かったからだ。平声が２種類と上声、去声、そして入声が清音と濁音で２種類、それで６種類だ。入声の次濁音と全濁音は当初は調値の分裂が明瞭でなかった」

「やけに細かいですけど、どうしてそこまで分かるのですか？」

「妄想だ」

「ハァ、でもその妄想には何かしらの根拠があるのでしょう」

「そう急ぎなさるな。まだ話は終わっていない。７世紀になると、全濁音声母が清音化する。つまり、平声の波［pɑ］・頗［pʰɑ］」・婆［bɑ］はそれまで声母で意味が区別されていたのだが、婆が［pʰɑ］と清音化したことによって、頗［pʰɑ］とは声調でのみ区別されるようになった。つまり、６世紀までは偶々濁音声母をもつ音節がやや低く始まるだけだったのが、７世紀には濁音の清音化に伴って、意味の区別を担うための異なる声調と認識されるようになった。しかし、詩を作る際には、伝統的な四声（平・上・去・入）を守らねばならない。科挙に作詩の試験があるから、それに受かるためには大事なことなのだ。唐代人にとっては、実際の口語における声調の体系とは別に、規範としての四声が存在したということだ」

「ふむふむ。妄想の概要は理解しました。ところで、入声で次濁音と全濁音でわずかに高さに差があるのはどうしてですか。」

「それは後の変化を考慮した結果だ。入声の-p/-t/-k が脱落する際に、その高さに近い他の声調に合流したのだ。清音の入声は高かったので、上声に合流する。次濁音では去声に、全濁音では低い平声に合流する。各声調のうち、清音声母で始まる高い方を陰調、濁音で始まる低い方を陽調という。平声は陰平声と陽平声に分かれたが、陽入声のうち、全濁入声は陽平声に合流し、次濁入声は去声に合流したのだ。陰入声に関しては、元代の『中原音韻』という資料では上声に合流したことが分かっているが、現代北京音では陰入声は１声から４声まで散らばっている。前に示した昔の四声と現在の声調の対応表を、声母別に詳しくした形で挙げておこう。この対応を知っておくと、ある字が中古音でどの声調だったかについても、かなりの部分まで言い当てることができる」

	平声	上声	去声	入声
清音	1	3	4	1･2･3･4
次濁	2	3	4	4
全濁	2	4	4	2

「あれ、上声は全濁音だけが去声に合流して、次濁音はそのままですか？」

「うむ。例えば、‘動 dòng’は全濁上声だったために去声に合流し、今では第 4 声になっているが、‘馬 mǎ’は次濁音だったので上声のままで、今は第 3 声だ。次濁音の調値は声調ごとに微妙に異なるようだ。平声では次濁音は全濁音と同じ振る舞いだが、上声では清音と同じ振る舞い、そして入声では清音と全濁音の中間になっている。全濁上声の去声への合流は比較的早く起こったようだ。さっきも言ったように、調値が近かったからだ」

「ふーむ。この調値の復元図は妄想にしてはよく出来ていますね」

「それはそうだ。なにしろ、声調の変化を説明できるように作った図だからな。妄想がよく出来ているのではなく、説明に都合がよいように図を作ったのだ」

「そういうことですか。でも実のところ、唐代の調値は全くの妄想ではないのでしょう？」

「うむ。日本では 1950 年代から唐代の調値の研究が盛んだった。頼惟勤（らいつとむ）や金田一春彦といった人たちによる、声明（しょうみょう）と呼ばれる仏教音楽のメロディーや、日本の古いアクセント資料などの丹念な研究を通じて、かなり具体的な調値が推定できるようになったのだ。それらによれば、平仄というのは、低い声調を‘平’、相対的に高い声調を‘仄’として、高低の対立だったということになる。そう考えると、‘南朝四百八十寺’の平仄も少し納得がいくのだ」

「む？第 6 字に‘十’が用いられて平仄を乱している箇所ですか？」

「そうだ。‘二六対’に反しているということだったが、第 2 字の‘朝’は陽平声すなわち低く平らな声調だ。そして第 6 字の‘十’も全濁入声だから低い声調だ。つまり、杜牧にとっては、ともに低い声調を用いたことで、‘二六対’に準ずる効果を狙ったということだ。平仄の決まりが出来た唐初の頃に比べると、杜牧（803-852）の時代にはすでに全濁入声は清音化し、かつ声調分裂によって非常に低い声調になっていた。だからこそ、一般に破格と見られながらも第 6 字に堂々と‘十’を使ったのではないかな。陽平声と全濁入声がともに低い声調ということで‘二六対’の感覚からさほど乖離していないと思ったのだろう」

「なーるほど！納得しました。唐代の調値の復元によって、破格と思われた杜牧の詩の平仄の感覚まで推察できるというのは、スゴイです！」

「いや、ただの妄想だ」

「ハハハ」

10. 夢の中へ

若菜は家に帰って、美味しかった‘舟和の芋ようかん’の味と、仙人から聞いた唐代の声

調の話を思い出していた。過去の音声を復元する試みというのは、何ともエキサイティングだ。それにしても、仙人はなかなかの曲者ではないか。‘ざっくり中古音’だとか‘妄想だ’などと言って、ゆるーい感じを装っているが、さりげなく核心に迫ってゆく様子がいかにも仙人らしい。クールな感じの葵先生と、少しとぼけた仙人の師弟コンビを想像すると、何だか可笑しくなる。

帰りがけに、またも宿題をねだったら、次のような問題が出た。

＜宿題＞

①全濁音の字が清音化した後に、無気音になるか有気音になるかを、声調ごとに調べよ。

②現代音で無気音 2 声で読む字がすべて入声であることを証明せよ。

先週の例からすると、これも①が②を解くための誘導問題なのだろう。すぐにも取り掛かりたい。でも、今からやると、夢中になって徹夜しそうだ。明日の楽しみにして、もう寝ることにしよう。夢の中で宿題を考えようかな……